



山梨の春

四月中旬の甲府盆地は桃色に染まる。満開の桜が散り始める前に桃も開き出す。点々とある菜の花の黄色とのコントラストがまた鮮やかで、華やかな景観に彩りを添える▼今年の桃は、例年にも増して迫力を感じさせるものがあつた。たまたま地元農家と話す中で、桃農家でも担い手の減少が激しく、摘花ができないところが急増しているという。桃の場合、花は実の数の三〇〜四〇倍も咲くことから、養分の浪費を避けるため、人手でせつせと蕾や花を落とす。その手間がかけられなくなったことで、桃の花が多くなり、迫力を増して見えるようだ▼にぎやかに桃の花が咲いている一方で感じたのが、虫の音のしない不気味な静けさだ。桃はもともと自家受粉するものであつたようだが、今では受粉を必要とする品種が増えてきている。受粉に、一部、ミツバチを使っているところもあるようだが、耳かきのようなものや、噴霧器を使って人工受粉をしているものがほとんどだ。担い手とはまた別のところで異変が起こっているのではと不安にかられる。レイチェル・カーソンの「沈黙の春」が想起される▼桃が花びらを落とした頃に、フジが見事な姿を見せてくれる。匂い立つフジのまわりを熊蜂やミツバチが飛び回る。勢いよく飛び回る熊蜂はオスで、自分の領域に別の蜂がこないように威嚇しているのだそうだ。ハチの針は産卵管が変化したものにつき、オスのハチには針がない。したがって刺されることはないとの生物の先生の解説と同時に、ハチがまだいること自体に安堵させられもした。 (土着菌)